

新和建設 だより ～新和のわ～

vol. 1

2026年4月24日発行



代表取締役 あまぬま れいじ
天沼 礼二

新和建設株式会社を率いる天沼社長。祖父の代から会社を受け継ぐ中で、さまざまな苦労を経験されてきました。今回は、社長就任までの道のりや建設業への思い、そして社員一人ひとりを大切にする独自のリーダー像について伺いました。

● 新和建設に入社するまでの経緯や、入社当初の様子についてお聞かせください。

新和建設のルーツは、かつて祖父が営んでいた天沼組という建設会社にあります。私が幼い頃にその会社が倒産し、父がゼロから立ち上げたのが現在の新和建設です。

しかし、当時の私にとって建設業は「泥臭くてきつい仕事」というネガティブな印象が強く、家業を継ぐ意思は全くありませんでした。そのため、

バブル絶頂期の1988年（昭和63年）、私は新卒で三菱石油株式会社へと入社したのです。

その後、勤め先の合併をきっかけに室蘭へ帰郷しました。当時は不景気で職探しに苦労し家業に入ったというのが、正直なところですが、入社後の経験が私を変えました。吹雪の中の除雪や、災害から地域を守る崖崩れ対策。そうした現場の最前線に立つうち、かつて抱いていた「泥臭い」というイメージは、いつしか「人々の生活を支える誇り」へと変わっていきました。

入社した当時は、経理を担当する母の横で、ひたすら資格の勉強に打ち込んでいました。結果、2級土木施工管理技士の試験に一発合格。毎日事務所で勉強ばかりしている姿から「学者」と呼ばれることもありましたが、この時期に蓄積した知識が後の経営に役立つこととなります。

● その後、社長に就任されるまでにどのような葛藤があったのでしょうか。

私が30代後半の頃、2000年代から東日本大震災の翌年頃にかけては公共事業が大きく減り、建設業界全体が非常に厳しい時代でした。当社も私が戻ってきてから十数年は長らく苦しい状況が続いていたのです。

母が亡くなり、経理を一手に担うことになった私は「好き放題に物を買われては困る」と、無駄遣いに対して厳しく目を光らせる「嫌われ役」を自ら買って出ました。父を経営面から支えるため、社長の息子という立場だからこそ言えた面もあります。本来、こういう役柄は自分の性に合っていないが、それでも当時は会社を存続させるために必死でした。

社長となった今ではむやみに怒ったりもできませんから、普段は冗談を言って場を和ませつつ、締めるべきところは締めるという「緩急」を大切にしています。あのときの覚悟と苦労が、現在の経営基盤を支えているように思います。

● 現在の新和建設をリードする上で、理想とするリーダー像を教えてください。

元北海道日本ハムファイターズの栗山監督が実践されていたような、サーバントリーダーシップを理想としています。これは、上に立つ人間が指示を出すのではなく、下からメンバーを支えて奉仕する（サーバント）という考え方です。父はトップダウン型のリーダーでしたが、私のやり方は異なります。上の人間が頭ごなしに命令するのではなく、トップが社員を支え、働きやすい環境を整えることで、一人ひとりの力を引き出す方針です。そのためにも、社員はもちろんのこと、協力会社の皆様など新和建設に関わるすべての人の気持ち

に寄り添い、大切にしよう心がけています。「ここで楽しく仕事できてよかった」と思える環境を作ることが、私の役割の一つだと考えています。

● 最後に、社員の皆さんと共に目指したい未来についてお聞かせください。

私は嘘をつくことや、心にもないお世辞ばかりを言う人があまり好きではありません。そうした誠実さを欠く姿勢は、裏で他者から何かを不当に奪い取ったり、誰かを傷つけたりすることにつながると思うからです。私にできることは限られているかもしれませんが、せめて私に関わる小さな世界の人たちだけでも、全員が気持ちよく幸せになってほしいと思っています。ただし、自分だけが楽をして他人にしわ寄せがいくような働き方は許されません。社員一人ひとりがしっかりと自分の責任を果たした上で、皆で喜びや幸せを分かち合える組織を築いていきたい。それが、私が目指す新和建設の未来の姿です。

過去の苦労を経て発せられた言葉の数々には、社員と向き合う率直な姿勢が表れています。サーバントリーダーシップを実践し、下から組織を支え続ける天沼社長とともに、新和建設の新たな一歩が始まります。



▲幼い頃の社長（左がお兄さん、右が天沼社長）

新和建設 ヒストリー

幾多の危機を乗り越え
築いた現在の基盤

一度の倒産や十数年にわたる赤字など、当社の歩みは決して平坦なものではありませんでした。創刊号となる本記事では、幾多の危機を乗り越えて築き上げた現在の経営基盤と、その根底にある地域社会を守るという使命について、天沼礼二社長からお伝えします。

新和建設のルーツ

一度の倒産と母の急逝を越え、不退転の覚悟で会社を守り抜く

当社のルーツは、私が幼少期に一度倒産を経験した「天沼組」にあります。その後、父が「新和建設」として再建しました。私が入社したのは1999年。経理担当の母の元で業務を学んでいました。母の急逝に伴い、私が実務を引き継ぎ、前社長の父を支えるかたちで経営の中核に携わるようになります。



▲当社を支え続けた天沼社長の母

転機 国道の維持・除雪業務への参入

赤字の十数年を乗り越え、地域を守るインフラ維持が現在の安定基盤へ

当社の大きな転機は、約30年前に北海道開発局から国道の維持・除雪業務を請け負ったことです。始めた当初の十数年間は赤字が続く厳しい道のりでしたが、粘り強く取り組んだ結果、現在の安定した経営基盤の一つとなりました。近年は国土強靱化の重要性が高まり、インフラを維持して災害から地域を守るこの業務は、非常に大きな意義を持っていると感じています。



▲若き日の天沼社長

2015年12月1日_天沼礼二社長就任

逆風のなかで誓った、社員と家族を守り抜く覚悟

2015年12月1日、私は社長に就任しました。就任前は公務員の兄が継ぐ話もありましたが、最終的に私が引き継ぐことになりました。当時は公共事業が減少し、建設業界全体が非常に厳しい時期。失敗が命取りになりかねない状況でしたが、「誰かに振り回されるのではなく、自分が責任を持ってやり抜く」と覚悟を決めました。社員やその家族の生活を守るため、いざというときは自分が矢面に立つと決意した瞬間でした。

2018年_北海道胆振東部地震後に再確認した仕事の意義

法面工事は、人々の命と生活を守る防波堤

私たちの仕事の重要性を痛感した出来事に、2018年の北海道胆振東部地震があります。前年、震源地にほど近い町で崖の崩落を防ぐ法面工事を行いました。施工中は、現場からも工事の必要性を疑問視する声があるほどでした。しかし翌年に大地震が発生したとき、施工箇所が崩落を防ぎ、結果として眼下の住宅地を守ったのです。一見目的がわかりにくい工事でも、いざ災害が起きたときには人々の命や生活を守る防波堤となります。私たちの仕事は地域社会の安全に直結する重要な使命を担っていると確信しました。

社内報

新和建設だより

～新和のわ～

創刊のお知らせ

新和建設の社内報がついに創刊されることになりました！

この社内報は、部署や世代の垣根を超え、全社員が「一つのチーム」として団結するための第一歩です。記念すべき第1号では、天沼社長の知られざる経歴や会社の歴史についてご紹介。次回以降もコンテンツ盛り沢山でお届けいたしますので、ぜひ楽しみに！



社内報を通して、こんな会社を目指します

point 01 部署や持ち場を超えた「思い」の共有

皆さんは普段、それぞれ異なる職種や持ち場で業務にあたっています。そのため、日頃感じていることや、ときには不満に思っていることなどを共有し合う機会が少ないのが現状です。社内報を通じて、そうした思いを互いに共有し、理解を深める場にしてほしいと考えています。

point 03 社外の皆さんにも「新和建設なら安心だ」と知ってほしい

社内報で皆さんの良い人柄や日々の頑張りを伝えることは、社外へのアピールにもつながります。「新和建設はこういう会社だから安心だ」と、入社を検討している方にも感じていただけるような、採用強化にも寄与するPRの役割も期待しています。

point 02 世代の隔たりをなくす

現在、社内には50代以上のベテラン社員と20代の若手社員が多く、年代の差が広がっています。現場での関わりだけではわからないお互いの人柄や考え方を社内報を通して知ること、世代間のコミュニケーションを活性化させ、この隔たりをなくしていきたいという思いもあります。

point 04 意思疎通の円滑化と団結

最終的な目的は、社員同士の意思疎通をよりスムーズにし、会社全体が一つに団結することです。部署や年代を超えてお互いを知り、円滑なコミュニケーションを図ることで、一つのチームとしてより良い会社を築いていきましょう。社内報がそのきっかけとなることを願っています。

私が担当します

社内報制作への意気込み

意外な一面を知ることができる楽しい社内報に



本社
おだ ゆみこ
小田 由美子さん

初めての取り組みということで、わくわくドキドキしています。社内報がどのようにできあがってくるのかも楽しみです。頑張っている皆様のお仕事の内容や意外な一面を知ることができるような、楽しくて読みやすい社内報になればと思っていますので、皆様のご協力よろしくお願いいたします。